

キルギス族の神話と伝説

瑪克来克・玉買爾拜 著
西脇隆夫 訳

訳者まえがき

この訳文は、キルギス族のマケレク・オムルバイ（瑪克来克・玉買爾拜）氏が著したキルギス語版『柯爾克孜族民間文学基礎』（克孜勒蘇柯爾克孜文出版社 1994年）第1章「キルギス族の神話」部分から訳出したものである。

原書では、Ⅰ. 神話についての説明、Ⅱ. キルギス族の神話観、Ⅲ. キルギス神話の種類に分けて紹介されているが、今回はそのⅡとⅢの部分からいくつかの項目を選んだ。

なお、この神話部分は、後に同氏が著した『柯爾克孜文学史』（新疆人民出版社 2005年）第5巻「叙事作品」の中に「神話」（437～492頁）として収められている。ただし、この著書を手にしたのが最近であるために、原著との校合は十分にできなかった。

キルギス族は、中国に居住する55の少数民族の中でも人口が多くない民族であり、2000年の調査では160,823人とされている。主に新疆ウイグル自治区のクズルス・キルギス自治州に分布し、天山山麓とパミール高原に居住している。かれらの自称は柯爾克孜（日本ではキルギスという表記が一般的であるが、クルグズが原音に近いとされている）であり、中国の歴史書では堅昆、契骨、吉里吉斯などと表記されてきた。

キルギス族の歴史は古く、紀元前からシベリ

アのエニセイ川上流地帯で遊牧生活をしてきた。その一部は15、16世紀ころからエニセイ川一帯のキルギス人は移住して天山地域に落ち着いた。その他のキルギス人はコーカンド汗国の支配下に入り、現在のキルギスタン共和国の主要民族になった。

かれらの言語はアルタイ語族テュルク語群に属し、キルギスタンのキルギス人がキリル文字を改良した文字を使用しているのに対してアラビア文字をもとにした文字を使用している。古代ではシャーマニズムを信仰していたが、現在ではイスラム教を信仰しスンニ派に属している。

民話、伝説、叙事詩などキルギス族の民間文学には多くの作品が見られるが、その中で世界的に有名なのはマナスチという語り手が伝えてきた英雄叙事詩「マナス」であり、特に中国のキルギス族には8部20数万行の作品が伝承されている。

著者の瑪克来克・玉買爾拜氏は、1954年に新疆ウイグル自治区のウルウチャト県に生まれ、1980年に新疆大学を卒業した。1982年より雑誌「語言与翻譯」の編集者となり、その後同誌の編集長、同雑誌社の社長を務めて現在に至っている。主な著書としては、前掲の二書以外に『柯爾克孜語正字法詞典』（新疆人民出版社 1989年）、『漢柯教科書名詞術語詞典』（新疆科技衛生出版社 1996年）、『漢柯新詞新

語詞典』(新疆人民出版社 1998年),『漢柯詞典』(新疆人民出版社 1999年)などがあり,訳書に『一位大師的足迹』(克孜勒蘇柯爾克孜人民出版社 1988年)がある。その他に「新疆柯爾克孜語方言」,「史詩『瑪納斯』中的神話色彩探索」,『『瑪納斯』史詩中有關一些歷史淵源』など多数の論文を発表している。なお,「語言与翻譯」2009年第1期の表紙と裏表紙に同氏に関する写真が掲載されていて,自治区の優秀な編集者として表彰されたことが紹介されている。

世界の創造

世界が創造された後に,それから天(蒼天),大地とコイカプが創造された。

「ジャラトカン」(創造神・造物主)は天(蒼天)を六層に創造し,それにその神々,福と恩恵をそなえた。天には日,月と星がつくられた。天上のすべての星は地上の人びとの生命であると考えられていた。

「ジャラトカン」は大地を七層につくり,地上には命,動物や人類がそなえつけられた。大地の自然の一部はすべてそれ自身が守護者,神であると考えられた。

「ジャラトカン」は大地の周囲に置くようにたくさんの大きな山脈をつくり,その側に「コイカプ」と名づけられたところをつくったときに,コイカプに妖怪,マムミト,魔術師,鬼婆,アルプ・カルカシ,プラタナスなどのようなものがそなえられた。

コイカプのものたちが地上に顔を出すと,人類にいつも恐怖が生まれ,「コイカプの入り口」のところで遮っている嵐や疾病が現れ,地上に「自然からの力」と名づけられたコイカプの恐ろしい力をもたらしたと考えられている。キル

ギス人の神話では,コイカプの力による人類の衝突,天の神々と人類との関係について,無邪気で想像力に富んだイメージがつくられた。

それ故,キルギス族は,世界を三つに,すなわち天(蒼天),大地,コイカプというものに分けて,そこに場所と住民を出現させたのである。

ジャラトカン 創造神

キルギス族の神話において,宇宙とその中の万物を創造し,作成した者は「ジャラトカン」と言い,かれは人間以前に宇宙を創造し,その後天,地,コイカプの万物を創造した。その時,世界,自然と人類に必要なものに合わせて,ジャラトカンは土地,水,森林,動物,生きとし生ける物を創造した。それらのすべてに日々の糧,御馳走を分け与え,さまざまな食物をつくったと説明されている。

ジャラトカンは万物と動物を自分の手で作ったと考えられていて,それについて美しくもおおらかな想像の神話的な物語が語られている。例えば,「ウサギの誕生」という神話では,ジャラトカンはすべての動物に肢体を分け与えたとき,ウサギがやって来た。ウサギにつくってやる手や足が残っていなかった。ジャラトカンはロバから耳を,ラクダから口を,犬からは爪を取って,それらを合わせてウサギの体につけ加えてやった。そのように「牛の腎臓」とか「動物へ幸運を分け与える」という神話では,ジャラトカンがさまざまな物や生き物をつくったことについて美しい描写が述べられている。

キルギス人の崇拜する民族の神々の中では「ジャラトカン」が最初の神であり,第一に崇拜する神霊であった。かれは宇宙のさまざまな物を創造し,残さず創造してから,いつも創造

したものを守り、保護して、維持してきたと信じられている。すべてのものから偉大だと見なされ、「ジャラトカン、お助けください」、「ジャラトカンをお願いします」、「ジャラトカンよ、お守りあれ」、「ジャラトカンよ、お救いあれ」、「ジャラトカンにお頼みます」という貴重な言葉が語られている。

キルギス人は自然を「ジャラトリシ」と名づけてジャラトカンが創造したという解釈をずっとしてきたのである。

天 テングル

キルギス族の神話では、ジャラトカンより後には、テングルを崇拝することがたいへん有力であった。テングルは人類だけではなく、宇宙の日や月、それに「森、火、動物」のテングルであると見なされていた。キルギス族の神話的な説明では、「テングル」すなわち天は蒼天であると言われ、テングルに何かを求めるとき、テングルにものを頼むとき、蒼天を見ながら話した。テングル（蒼天）から、日々の糧、福運、幸福が運命を与えられた。テングルが人間の語る言葉や希望を聞いていると考えられていた。誤ったことや悪いことを行うと、テングルは罰したり、凶暴になると恐れられ、清潔なテングルの支持によって神は行うと考えられている。

「テングルよ、助けたまえ、テングルよ、罵ろ、テングルよ、踏みつけろ、従わせろ、テングルよ、仕事を行え」という貴重な言葉が語られている。

テングルの崇拝はキルギス族では早くから現われていた。テングルについての神話的な説明からはいつも、キルギス族の神話では多くの無邪気なイメージがつくられていた。例えば、蒼天と天女たちと英雄との出会い、アヤーズ・テ

ングル（アヤーズ・アタ）、火神などのようなものの神話が語られている。

母神ウマイ

「母神ウマイ」はキルギス人の崇拝する神である。母神ウマイについての神話は人類の「母系制社会」の時代から現われていた。キルギスの神話では母神ウマイについておおらかで美しく想像力豊かな話が語られ、母神と子どもたちの保護神、守護神としてのイメージが創造されている。

母親の腹の中で子どもが母神ウマイに向かって「娘となろう、息子となろう」と泣いていた。その時、母神ウマイはその性質によって調整し「娘になろう」と泣いていた者を息子にし、「息子になろう」と泣いていた者を娘にし、リュウマチに効果があった。そこで子どもが生まれたとき青色が（恩恵のしるし）が出ていると伝えられている。そこで、母神ウマイは子どもを男女に分けるしるしをつけると考えられている。

母神ウマイが母親と子どもを病気から守ると考えられていて、続けて子どもたちを治したり治療するとき「私の手ではなく、母神ウマイの手だ」という言葉がとなえられて、治療される。

家で子どもをひとり寝かせておいて、そのまま出かけるときには「母神ウマイにおまかせする」と考えて心配しないでもよかった。幼児の顔を「母神ウマイが洗ってくださる」と言って太陽の光を浴びせる。

キルギス族の神話では、母神ウマイのイメージや話について、たくさんの美しい作品が生み出されている。

地母神

キルギスの神話では「地母神」についての説明として、それが「泥土」だという考えが見られる。

その神話的な説明によれば、人間は泥土から生じ、泥土に入って、泥土から日々の糧を得て暮らしていたと考えられていた。それに、キルギス人は「地母神」(泥土)だと知っていた。

人間は母親の腹から生まれるとき、へその血が泥土に落ちる。キルギス人は子どもの血が落ちた大地をたいせつにしている。その場所に定住する機会があるなら、いつも管理し、健康になると思ってそこに横たわって転がる。長らく旅行に出かけるときには生まれた土地の泥土から一つまみつかんで自分の伴にして、神聖な守護神のよう身につけて行く。生まれた土地を非難せず、踏みにじらない。

悪いことをしたり、犯罪を犯したら、「大地を吸う」と考えられている。「けちん坊は大地を吸う」という神話に似たような話が語られていて、「地母神」の偉大な姿が創造されていたのである。

キルギス族の起源神話

西暦636年に唐令たちが編集した『周書』という漢文史料の巻50には、キルギス族の起源について次のようなトーテム神話が記されている。

「突厥族の起源はサカ人であると言われ、かれらの祖先は匈奴の北方で暮らしていた。阿誘歩の時代になったとき民族は滅ぼされて、17人の子どもだけが無事だったと言われる。それらの子どもの中で一人の女性から生まれた子どもである「伊質泥師都」はサラタンという名前

の娘を娶った。さらに、アヤズという名の娘を娶った。かれは雨を降らし、風を吹かせることができた。それから4人の息子が生まれた。その子どもたちの一人は白鳥に変わった。もう一人の子どもの民族がアバカン河とケム河のあいだで暮らし、キルギスと名づけられた。また、一人の子どもの民族は大ケム河の荒野で暮らしていた。その当時、長男はバシ・ケム山を占拠していたと伝えられている。

山のあいだで阿誘歩の子孫たちは暮らしていたといわれる。かれらは長男に権力を与え、突厥と呼んだ。かれは以前那都六設と呼ばれていた。かれは10人の妻を娶った。生まれた子どもたちの母親の民族をウイカシと呼んでいた。阿史那は年下の妻が生んだ五番目の子だった。かれはポプラの木によじ登った後に、最も高いところによじ登ることができた。そのため、かれはナトルシ汗の後継者となって、阿史那氏と呼ばれた」

我が国の「二十五史」の一つである『周書』に見られる、このトーテム神話では、キルギス人の東方部族「サラタン・アタ」と呼ばれた「夏のテングル(夏神)」と「アヤズ・アタ」と呼ばれた「冬のテングル(冬神)」の種族の関係についての情報を与えていた。この神話からみたととき、この素朴な想像はその「母系制社会」という時代にこそ生じた種類のものとして存在している。そのように物語る理由が「子どもの母親をウイカシと呼んだ」という言葉で表わされている。

しかし、書かれた歴史はキルギス人の祖先について、このトーテム神話はキルギスの神話で最も早い時期の神話的な解釈であり、神話の芸術的な語りであると考えられている。

ウサギの誕生

ジャラトカンはずべての生きとし生ける物の器官を作り、それ自身にふさわしいものを集めて与えたときに、ウサギは驚き恐れて、ジャラトカンのところへすぐに行くことができず、その後ろに残っていた。残った生き物たちに器官を完全にそなえてもどすことができたとき、ジャラトカンが一人になったとき、そのウサギがやって来て「私の器官をください」と言うと、そこでジャラトカンは怒って「すぐに来ることができなかつたから、私は器官をみんな与えることができない。今や、おまえには何も残っていないぞ」と言った。

そこでウサギは「それなら、私にふさわしい器官を下さらないのですか」と泣き出した。やむを得ず、ジャラトカンはロバから小さい耳を求め、ラクダから唇を求め、犬から足を求め、ヤギから尾骨を求め、ガゼルから腰を求め、それらを集めて「ほら、これらを器官にしてやろう」と、ウサギに与えてやった。

このために、ウサギの耳はロバの耳に、唇はラクダの唇に、足は犬の足に、尾骨は山羊の尾骨に、腰はガゼルの腰に似せてつくられたそうである。

「ウサギの誕生について」という神話では、生きとし生ける物のさまざまな種類の誕生という起源神話がおおらかな想像によって説明されている。私たちはこれから、動物を研究するのにその形、外観を理解していた祖先たちの素朴な知識をうかがうことができる。

牛の誕生

ジャラトカンはずべての生き物の器官をつくって与えてやった。牛もすべての器官を手

いれ、腎臓をもらったとき、一匹のトンボが飛んできて刺されてしまった。

その痛みに耐えられず、腎臓を忘れてしまい、しっぽを振りながら逃げ去ってしまった。ある時、トンボが逃れて、肺臓がつぶれたことを後になって分かり、二つの腎臓がなくなり、二つの腹に傷口が開いてつぶれていた。それから、鼻息をたてながらやってきて、ジャラトカンに腎臓を求めた。ジャラトカンはずべての動物に腎臓を分け与えてしまったので、腎臓は残っていなかった。再び動物を集めて、腎臓を探し集めて、牛に腎臓を与えてやった。このために、牛の腎臓は40歳の年齢になったそうだ。

この神話は、牛の腎臓が変わらないかたちで現われたということを語った、すばらしい説明であると考えられている。このような見解はこの地上の万物の創造主がジャラトカンであるということがやはり語られている。

巨鳥 アルプ・カラ・クシ

コイカプのところへ棲息していた鳥から、アルプ・カラ・クシは生み出された。

アルプ・カラ・クシはたいそう大きな鳥であり、その巣は梧桐の木だったと伝えられている。アルプ・カラ・クシが飛んだときには、暴風が吹き、山からは岩が落ちてきて、たいへん恐ろしいものであった。それが梧桐の木にもどって来て留まったとき、梧桐の木は7度も曲がって地面に触ってから元通りになったそうだ。

キルギスの民間口承文芸では、アルプ・カラ・クシについて語られた民話（例えば、「幸運な子ども」のような話）がたくさん伝えられている。キルギス族の叙事詩においては、アルプ・カラ・クシの姿は際立って描かれている。

キルギス族の神話では、アルプ・カラ・クシ

は人間が施した恩恵を知ると、英雄をコイカブ（地下）より地上に連れて出て行き、放置され、捕えられ、閉じ込められていた英雄を助けたことについての話が語られている。

アルプ・カラ・クシについての神話は叙事詩「エル・トゥシトック」で次のように語られている。

竜からアルプ・カラ・クシの子どもたちを助けたという恩に報いるため、アルプ・カラ・クシはエル・トゥシトックを地上に連れて出ることと同意し、六ヵ月分の肉と水を用意し地上に出るための六ヵ月の旅に出発した。

エル・トゥシトックを背中に乗せてやり地上に向かって飛ぶ前に、アルプ・カラ・クシはエル・トゥシトックにこのように言った。

「私が右の方に首を向けたときに、口の中に肉を入れてください。左の方に首を向けたときには渴いているので、水をください。もしも二つのうち一つでも足りなくなると、あなたを地上に連れて出て行けなくなって、もどって来てしまいます。これを覚えておいてください」

そう言って、鳥は飛びはじめた。

六ヵ月の旅をしているとき、エル・トゥシ・トックはアルプ・カラ・クシが話したように行い、肉と水を鳥に与えた。

ところが、まだ一日分の距離が残っているときに、肉と水をつかいはたしてしまい、肉も水も残っていなかった。アルプ・カラ・クシが右の方に首をむけたとき、エル・トゥシトックは与える肉がなかったため、その代わりに自分の両足のふくらはぎの肉をえぐり取って口の中に入れてやり、水はつかいはたしたので、アルプ・カラ・クシが左の方に首を向けたとき、エル・トゥシトックは眼をたたいて水を取り出して与えた。もうすこしの道のりでは腕の肉をえぐり取って飲みこませた。

それによって地上によく飛び上がって地面の上に出たとき、アルプ・カラ・クシはエル・トゥシ・トックのふくらはぎの肉や前腕がえぐられているのを見て、人の親切から身内のように思え、自分の眼の水でエル・トゥシ・トックの傷を洗ってやると、エル・トゥシ・トックはとても元気になりその場で立つことができるようになった。けれども、股は曲がり、ひじは前に曲がってしまった。以前、人間は手足が円筒形で、すべて丸々としていた。それからというもの、人間の股の肉や腕の筋肉は曲がってえぐられたようになった。以前、人の眼から涙は出なかったけれども、それからは眼から涙が出るようになったそうだ。

この神話は、人間とアルプ・カラ・クシの関係、それだけでなく、人間のいくつかの器官の構造がアルプ・カラ・クシとそのまま関係しているトーテムの説明が語られ、おおらかで想像力に富んだ作品になっていると考えられる。

キルギス族の民間口承文芸では、アルプ・カラ・クシがコイカブのものたち（巨人や魔女たち）に奉仕することについての話がいくつも語られている。ある人の雌馬は金色のたてがみで丸々とした馬を生んだ。ところが、その一頭をアルプ・カラ・クシが選びにやって来た。見ると、アルプ・カラ・クシが馬をコイカブに連れて来た……

キルギス族の魔法昔話や神話では、アルプ・カラ・クシについて多くの話が語られ、すばらしい姿が描かれている。語りたいたって、アルプ・カラ・クシはコイカブのその他のような存在に似たものでなく、神話的でおおらかな想像を通してつくられた美しい文学的なイメージであると考えられる。

鹿の母 鹿媽媽

キルギス族の鹿氏族の起源について、「鹿の母、鹿の角の母」という美しい神話がキルギス族においてずっと古い時代から語られていた。「鹿の母」についてのこのトーテムの話はキルギス人の中では広く流布していたことから、さまざまに語られた異文もたくさんあった。以下に、その一種について紹介しよう。

以前、カラ・ムルザ、アサン・ムルザという親戚同士の猟師が二人いた。ある日、アラ・ミシク山に狩りに出かけ、雌鹿の住みかを見つけた。よく見つめると、雌鹿のあいだに雄の鹿の子と雌の鹿の子が混ざりあっていた（また、ある伝説では、鹿の子にエサをやっていた雌の鹿を射ると、一人の女性が現れて、「独りっ子を射るなら、おまえの子を射るよ。ラクダの子を射るよ」と罵った。その女性は捕まえられて行った）。猟師たちはその鹿の子を射た。弟を殺された娘は震えてひどく泣いていた。「おまえの部族を百まで生かさな。百まで生きようとしても、秋まで生かさな」と、かれらを罵った。

猟師たちは娘を村に連れて帰ると、ある若者に与えた。娘の頭には鹿の角のような小さな角があったと言われる。

ある日、その猟師が狩りに出かるとき、「角のある娘」は「今日、災いが降りかかる」と言った。その日、かれらは角が一本の白い鹿を射ってもどって来たが、その娘の親戚だったそう。また、ある日のこと、かれが茶褐色の鹿を射ってもどって来ると、そこで、娘はその雌鹿の乳をくわえながら泣いたそう。見ると、その鹿は娘の母親であったそう。娘は二人の猟師を見つめていたと伝えられている。

その後、娘は「角のある母親」になってい

た。以前の「鹿の娘」が、二日経つと鹿の母になって頭を洗うとき、かれらに「汚い水をきれいな大地に注げ」と言った。けれども、かれらはその性格を知っていたので、「鹿の母」の髪の毛の汚い水を飲んで、残ったものは体に浴びせた。それから、かれらの種族が増えるようになったということだ。

「角のある母親」が死んだとき、骨は冷たくなって白灰色の家に置かれると大地から反すう動物に変わり、山を守るようになったそう。

今のキルギス人の鹿氏族はその「鹿の母」の種族がなったものであり、「鹿」と呼ばれるようになったといわれる。

しかし、キルギス人はみんな鹿を神聖なものだと知ようになる前からそのようにふるまってきたのである。墓地に鹿の角を置くのは現代になってからのことではない。それは、その牧場でしだいに「鹿の母」についてのトーテム神話の後に語られた話ではなく、その「母系制社会」の評判にもとづき、おおらかで想像力豊かなすばらしい話として語られていて、「鹿」トーテムはひとつの部落だけでなく、キルギス人の全体に共通の現象と考えられる。

狼

狼のトーテムは最も古い話に現われていて、キルギス人自身の中に含まれる突厥人、すなわち「テュルク」民族と結びつけられて語られていた。この話は『周書』の中に記されている。しかし、我われキルギス人にだけ語られてきた様子を紹介しよう。それはつぎのようなトーテム神話として語られている。

むかし、ある人が村里で子どもを育てている狼を眼にした。その人が近づいて見たとき、狼は山腹の方に去って行った。その子はふつうの

人間の子どもであった。その人はこの子どもを連れて帰り、その名を「カバ」と名づけ、大きくなるまで育てた。カバの髪の毛は狼のうなじの毛のように立っていた。(他の言い伝えでは、カバの前額から背中までたてがみが生えていたといわれる)。それで、「ジャルドゥ・カバ」と呼ばれていた。今のキルギス人の「カバ」部落はその「ジャルドゥ・カバ」の氏族から始まったといわれる。

このトーテム神話は、それ以前の「突厥」の狼トーテムとよく似たかたちで語られているので、キルギス人の狼トーテムも以前からあったことが確かめられる。狼が子どもを乳で育てて大きくする話から、叙事詩「マナス」では英雄マナスのもう一つの呼び名が「蒼いたてがみ」であると語られていて、このことばは意味なく語られているのではなく、キルギス人のトーテムが狼であるという認識によって語られていたことがうかがわれるのである。

馬神 カムバル・アタ 康巴爾阿塔

カムバル・アタすなわち馬神は、馬たちの保護神、守護神と言われている。

カムバル・アタは馬を病気から救い、災いから種族を守り、その発展を支えていた。

カムバル・アタは無形から小麦を増やし、マナスのアク・クラに似た珍しい馬を送りとどけた偉大な保護神としてキルギス人の口承文芸ではたくさん語られている。カムバル・アタがくり返し生んだ馬は人間のように話すことができ、英明な神のように助言も与えた。カムバル・アタは馬のトーテム（種族・民族）として表わされたイメージであり、カムバル・アタは民族を守り、保護してきた、という見方にカムバル・アタのイメージが表わされている。

ラクダの神 オイソル・アタ 奥依索勒阿塔

オイソル・アタすなわちラクダの神は、山の主要な保護神である。山から病気をなくし、種族を発展させるように守り、保護するといわれている。

山の力「ラクダ」は、唯一のこぶが背骨全体にわたって「ナル」と呼ばれている。

キルギス族の口承文芸では、神聖な復活から生まれた叙事詩「マナス」の「カラ・ナル」と別の民話の「銅のラクダ、白鳥インゲン」に似た神話観（人間が神聖化されている）に現われているイメージが描かれている。

羊の神 チョルボン・アタ 巧力潘阿塔

チョルボン・アタすなわち羊の神は、その種族を発展させ成長させる守護神であった。チョルボン・アタが羊の神であるという信仰、見解になっていて、羊を病気から守ったとき、羊が繁殖するとき「チョルボン・アタよ、守りたまえ！」という珍しいことばが語られた。しかし、民間口承文芸ではチョルボン・アタのイメージについての神話はそれほど多くない。さらに、ある物語では「チョルボン・アタ」が最初に羊を飼いならして、その種族を発展させた人として語られている。

牛の神 ゼンギ・ババ 烏衣桑巴巴 桑戈巴巴

ゼンギ・ババは牛類（ヤク、アルギン）の主人であり、その守護神、保護神であると伝えられている。

キルギス人のトーテム的な説明によって注目されるゼンギ・ババの姿はキルギスの民間口承

文芸ではほとんど語られることがない。しかし、ゼンギ・ババは牛類を守り、それをさまざまに災いから守り、種族を維持させたという信頼が今日まで続いてきたのである。

神鳥 ブダイク 布達依克

ブダイクは鳥類の神であり、その長であり、主人であった。

ブダイクの姿と外観は神話的なイメージを次のように話されている。

ブダイクは、灰色の眼をしていて、斑色の毛、その声は恐ろしく、けづめがあり、エサを食べる口は銅であり、翼は刀のようで、尾っぽは一抱えもあり、指は人のように五本あり、その体すべてが他の鳥たちとはまったく異なる鳥だった。

ブダイクについて、キルギス族の民間口承文芸では広く語られている。つまり、ブダイクは鳥類の神であり、主人であるなどという、トーテムを表したイメージがキルギスの神話や伝説ではたくさん述べられている。

鳥の主人ブダイクの神話的なイメージと、自然のイメージが叙事詩「ブダイク」において最も美しく描かれている。ブダイクが鳥類の長であることから、とても神聖な生き物であるというイメージが創造されている。ブダイクの話や姿は、叙事詩「コジョ・ジャン」で灰色のヤギになっていたとき、獵師のカラ・テレクや獵師のコジョ・ジャンなどがブダイクから報いを受けたことに表わされている。

ブダイクは生きとし生ける物の神であるように自然に存在する生き物ではなく、トーテム的な見解にもとづいて文学芸術に現われたイメージと考えることができる。

犬の神 クマイク 庫麻依克

クマイクは「バルタ・ジュタル」という鳥から生まれたと伝えられている。その鳥はアルティ・ベレス・アチ山に行ってお産をすると、生まれた子どもは三日で子犬となって鳴いていたといわれる。それから、それが小さなときに探し出して、訓練しながら飼っているとクマイクになった。お産をして3日過ぎると、「バルタ・ジュタル」は飛んでもどって行った。

クマイクについて、このような伝説が語られている。ところが、キルギスの民間口承文芸ではクマイクは「犬の主人」であり、犬たち種族の保護神、主人として現れ、神聖な動物としてのイメージがつくられている。クマイクに見られる特性は人に親しく近づき、人を野獣から防いだり助けていたことである。例えば、コイカプから魔女が地上に出てくると、その中の七つのキュンキュルの地からクマイクはそれを覚えて吠えながら出てくる。いつもこの犬は、魔女に歯をむきだす。魔女はクマイクがいる家には思い切って行動することはできない。このようなイメージはキルギス人の「不思議な物語」では広く話されている。

叙事詩「マナス」ではクマイクはマナスを守る神聖な動物のようであり、マナスの後に従い、かれを守り、マナスが死んだときにクマイクも消えてしまう。その後、英雄セメテイが現れると、クマイクも再び現れる。

そこで、キルギスの民間口承文芸では、クマイクは主人であり、以前はどのような獲物もよくとらえることができたが、人間を自然からの危険な力より守ってくれるというイメージで描かれている。

参考文献

張彥平，郎棧『柯爾克孜族民間文学概論』克孜勒蘇
柯爾克孜文出版社 1992年
藍鴻恩他『中国各民族宗教与神話大詞典』学苑出版

社 1993年
滿都呼『中国阿爾泰語系諸民族神話故事』民族出版
社 1997年
賀繼宏，張光漢『中国柯爾克孜族百科全書』新疆人
民出版社 1998年